

大垣の城と城下町施設の配置形態に関する考察

A STUDY ON THE INSTITUTION ARRANGEMENT FORM OF CASTLE AND CASTLE TOWN IN OGAKI

油 浅 耕 三*
Kouzou YUASA

This paper, from the site of the maps of castle and castle town, deals with the institutions of castle and castle town in Ogaki.

As the results of this study, on the whole, the arrangement form is the consideration, in the important relation of the river, the moat, the "Hondou" (the main road in the castle town), the lay of the land and the site character.

Keywords: Ogaki, institution arrangement form, castle, castle town, map of castle and castle town
大垣、施設の配置形態、城、城下町、城と城下町絵図、

1. 緒言

いうまでもなく、今日の、日本の現代都市の多くは、近世に、全国的に誕生した城下町を淵源としている。そして、この城下町では、その展開を通して、様々な施設を造りだしてきている。

この近世の施設については、全体として、従来、藩校とか長屋とかといったような、個別の施設の建物を問題として、扱われてきている。城や町の中で、施設に対する配置上の側面からの考察がない。

本研究は、当時の城や城下町を描いた絵図を個々の町ごとに収集し、施設の表現内容を整理考察して、その配置上の特質を捉え、今日の施設のあり方を考える上での、基礎資料に、繋げてゆこうとするものである。

2. 研究の方法

城や城下町に関する絵図には、それぞれ作成目的があり、絵図の表現内容に違いをもつ。個々の絵図

に描かれた内容は、城や城下町全体の中での位置、つまり、具体的な配置の形が捉えられるところに、特色をもっている。

また絵図の書き込みによっては、施設の向きや施設の具体的な形状を捉えることもできる。

以下のような方法によって、城と城下町の施設を考察する。

- 1) 大垣の城と城下町の絵図を全国的に収集する。
- 2) 収集した絵図を編年的に整理しつつ、また各絵図を相互に比較しつつ、かつ各施設の関連性を考えながら分類整理する。
- 3) 各絵図に描かれた施設内容を総合し、かつ藩政時代の史料とも対応させつつ、なぜ、各施設がその位置に立地しているのかを、川・堀・道路・城の曲輪・侍屋敷・町屋敷などとの関係を通して考察する。

3. 城絵図と城下町絵図

大垣は、寛永11年(1634)に戸田氏鉄が入城以来、代々戸田氏の子孫が相継いぎ明治に至っている。また、昭和20年7月には、戦災で大垣城の天守を消失しているという歴史的な背景をもつ。

*新潟工科大学 建築学科 教授・工博 Dr. Eng., Prof., Dept. of Architecture, Niigata Institute of Technology

この大垣では、絵図の表現様態および絵図の外題や内題から、外堀内を城絵図、外堀外をも描いた絵図を城下町絵図とし整理した（「表-1」）。

収集した絵図は19枚で、城絵図が4枚、城下町絵図が15枚である。19枚の内、絵図の年代が記入されているものあるいは、絵図の表現内容からすでに、年代考察がされているものが8枚である。

「表-1」は、この8枚の絵図の表現内容をもとに、年代不詳の絵図11枚について、大まかな年代の整理をした。

「表-1」の⑫・⑬（以下、丸数字は、「表-1」のこと）は、同じ表現内容で、どちらかが写し絵図と見られるが、収集した絵図の中では最古のものであって、「伊勢町」・「旅籠町」という古い町名の書き込みがあるとところに特色をもつ。

また、特に、⑤・⑦・⑧・⑩・⑰・⑱には、城と城下町の施設考察での内容に見るべきものがある。

⑤は、城内の天守・櫓・門・厩・蔵などの建築物を具体的に描き込んでいる。

⑦（図-1）は、城と城下町が完成した時期のもので、城の建物の形状をよく伝えている。

⑧（図-2）は、部分絵図ではあるが、堤・門・柵・腰掛等、各種の施設を伝えており、貴重である。

⑩は、町屋敷部分の町家や社寺境内の建物の状況を具体的に伝えている。

⑰（図-3）は、当時の寺院名を記述しているという特色をもつ。

⑦・⑧・⑰には、各種の施設を示し、考察してゆくこととしたい。

表-1 大垣の城絵図・城下絵図

	名 称	年 代(年)	所 蔵	大きさ (cm)	備 考
城 図	①美濃国大垣城図 ②濃州大垣	正徳5 年代不詳 (寛永18~正徳5)	大垣市立図書館 名古屋市立蓬左文庫	98.5 × 141.5 30.0 × 39.0	彩色 彩色
	③大垣城郭図	年代不詳 (正徳5~慶応4)	大垣市立図書館	96.5 × 108.0	彩色
	④大垣城内曲輪図	年代不詳 (正徳5~慶応4)	大垣市立図書館	80.5 × 78.5	彩色
	⑤大垣城並大垣之図 ⑥濃州大垣城図 ⑦美濃国大垣城絵図 ⑧大垣大火焼失絵図 ⑨大垣城下図 ⑩安八郡大垣町絵図 ⑪美濃路大垣宿 軒別絵図面 ⑫濃州大垣城図	寛永14~18 寛永18 正保頃 元禄5 享保頃 享和元 天保14 年代不詳 (寛永18以前)	清水正之氏 国立公文書館 国立公文書館 大垣市立図書館 田村頼一氏 大垣市立図書館 大垣市立図書館 大垣市立図書館	157.0 × 205.5 66.5 × 80.0 212.0 × 268.0 77.5 × 104.5 (5枚組) (軸物) 81.0 × 118.0	彩色 彩色 彩色 彩色 彩色 彩色 彩色
城 下 図	⑬濃州大垣城図 ⑭濃州大垣 ⑮美濃国大垣 ⑯大垣城下並二里 四方近郷之図 ⑰美濃路大垣宿 ⑱濃州大垣地図 ⑲美濃路大垣垂井間 往還並枝道間道絵図	年代不詳 (寛永18頃) 年代不詳 (寛永18頃) 年代不詳 (正保頃~享保頃) 年代不詳 (享保頃) 年代不詳 (嘉永5~慶応4) 年代不詳 (正保頃~慶応4) 年代不詳 (承応3~慶応4)	徳川林政史研究所 広島市立浅野文庫 名古屋市立蓬左文庫 江馬寿美子氏 大垣市立図書館 国立公文書館 大垣市立図書館	『諸国当城之図』 『主図合結記』 85.0 × 62.0 68.5 × 58.0 32.0 × 214.0	彩色 彩色 彩色 彩色 彩色 彩色 彩色

4. 施設の種類と配置形態

「表-1」の絵図の表現内容より、以下のような施設を取り上げた。

★堤 城下町東南部の「新町」や足軽町の部分は、地形の面では、城下町の中で最も低い地域（現状地形図より）であり、侍屋敷の書き込みのある地形の高い部分とは異なる。

⑧には、この地形の低い点を裏付けるように、京口の東側に「堤町」とあり、新町の北側より東側にかけて外堀の外側に沿って「堤」が走っている。

★橋 「表-1」より、城の東部から西南部には、10程度の木の橋を、城の東北部から西部にかける部分には、30程度の橋がみられ、ほとんどが土橋である。この土橋の部分は、侍屋敷の部分であり、町屋敷の部分が木の橋であるのと、意識的に区分け

て計画していたと考えられる。

また、江戸時代の初期から中期に、城の外堀の東部から南部にかけ、3つの橋が架設されたのに対し、ほとんどが侍屋敷の東北部から西南部にかけては、橋の架設はなかった。架設されたのは、何れも木製であり、城の東北部から西南部にかけての侍屋敷の橋が、土橋であるのと異なる。

大垣の場合、船町の本道（美濃路）部分に、「擬宝珠付きの高欄の橋」が、みられる（⑦）点を特に指摘しておきたい。

★船入 ③に「御船入」とあり、⑨にも「船入」とある。③・⑨ともに、船町川に面して大きく食い込んだ形の船着き場が表現されている。

いわゆる荷揚げ地であり、南の桑名や西の垂井からの物資が集まる場所である。

この船入の部分は、城下町では、城と共に、もう一つの核として位置付けができ、町屋敷の実質的な中心として、日常の暮らしでは、最も賑わったところといえる。

★樋 ⑩には、東北部の名古屋口の東側に「埋樋」の書き込みがある。また、樋は、全体として、城下町全体を描いた絵図では描かれることはほとんどなく、町屋敷などを描いた「町絵図」に堀や江筋などの表現に関連して、描かれている場合が多い。

樋は、この大垣でのように、川と堀、などを繋ぐ接点の部分で、地形に高低差のあり、堀や江筋の周辺部に設けられることが多いといえよう。

★常夜灯 ③には、現状でも存在する、船町川の西側の部分に、船町川にこの常夜灯部分がやや張り出した形で表現されている。

船入の水運と常夜灯は、当時から、切り離せない関係とみるべきである。

★高札 ⑩・⑬で確認でき、城下町の東側では、名古屋口に近い本町の西北部分で、道路の溜まりの部分。西側では、船町の西端部分におかれている。

柵に囲まれた、切妻屋根の状況を伝える。

ともに、美濃路という往還道としての本道にあり、町屋敷部分である。「高札」は、主として、町人を意識した施設としての側面の強いことが、この配置形態からもうかがえる。

★門 ⑤・⑥・⑦・⑧・⑩・⑪など、中堀を取り巻く、本道の走る側の、重要な枳形部分に、「櫓門」

が描かれている。

また⑥・⑦では、「平棟門」が侍屋敷部分にみられ、⑥には、「冠木門」も侍屋敷の部分にみられる。

⑧では櫓門、平棟門、冠木門がみられるが、東部から南部にかけの橋の部分は平棟門、京口門の先や材木蔵の屋敷の道路側に、冠木門がみられる。

名古屋口、京口、大手口では、櫓門の前に平棟門を置く形を共にとっており、固い門としている。

なお、⑤には、各侍屋敷の道路に面する部分の所に、平棟門が一つづつ描かれている。

★柵 城と城下町は門と共に柵で仕切られていた。

⑧には、全昌寺の南の道路部分に、柵がみられるが、櫓門、平棟門、冠木門に次ぐ手段として位置付けられていたことがうかがえる。

★数寄屋 ⑧の「松丸」部分に「御数寄屋」の書き込みがある。⑧では、矩形の区画のみで、具体的な建物の形状はわからないが、数寄屋風の建築様式をもった内容と考えられる。

当時、城内にかかる建物の存在していたことは、城や、大垣城の特質を考える上で注目したい。

★本陣 ⑧・⑩・⑬・⑭で確認できる。大手の内、南口と称する、京口側の大手（西側）を「本陣」とし、名古屋口側の、いわば正式の大手側を「脇本陣」としているのは、「京」を上（かみ）として位置付けたことによるのかもしれない。

★馬場 ⑫・⑬の京口の西南部に「新馬場ト云」なる書き込みがある。この部分の西隣が、⑧には、「本馬場」と書き込まれている。

侍屋敷の多くが、この馬場の北側にあるが、侍屋敷に近く、しかも、侍屋敷群の端にあたり、船町川

という自然景観に恵まれたこの一帯は、馬場としての地域性に適した地域としてみることができる。

★厩 「厩」は、必要に応じ、厩の規模を変えて、城内にいくつかあったとみられる。

城の各曲輪において、建物の近くまで、馬に係わった生活が、実状としてあったとみることができ、特に⑧には、三丸に近い城内に「御厩」と「御成厩」の書き込みがあり、城と厩との係わりを考える上で留意すべきである。

★蔵 ③・⑤・⑥・⑦・⑧・⑫・⑬に、書き込みがある。特に⑧で「柳御蔵」の書き込みのある部分は、⑤に、平屋建ての建物が、屋敷の南側と西側に見ら

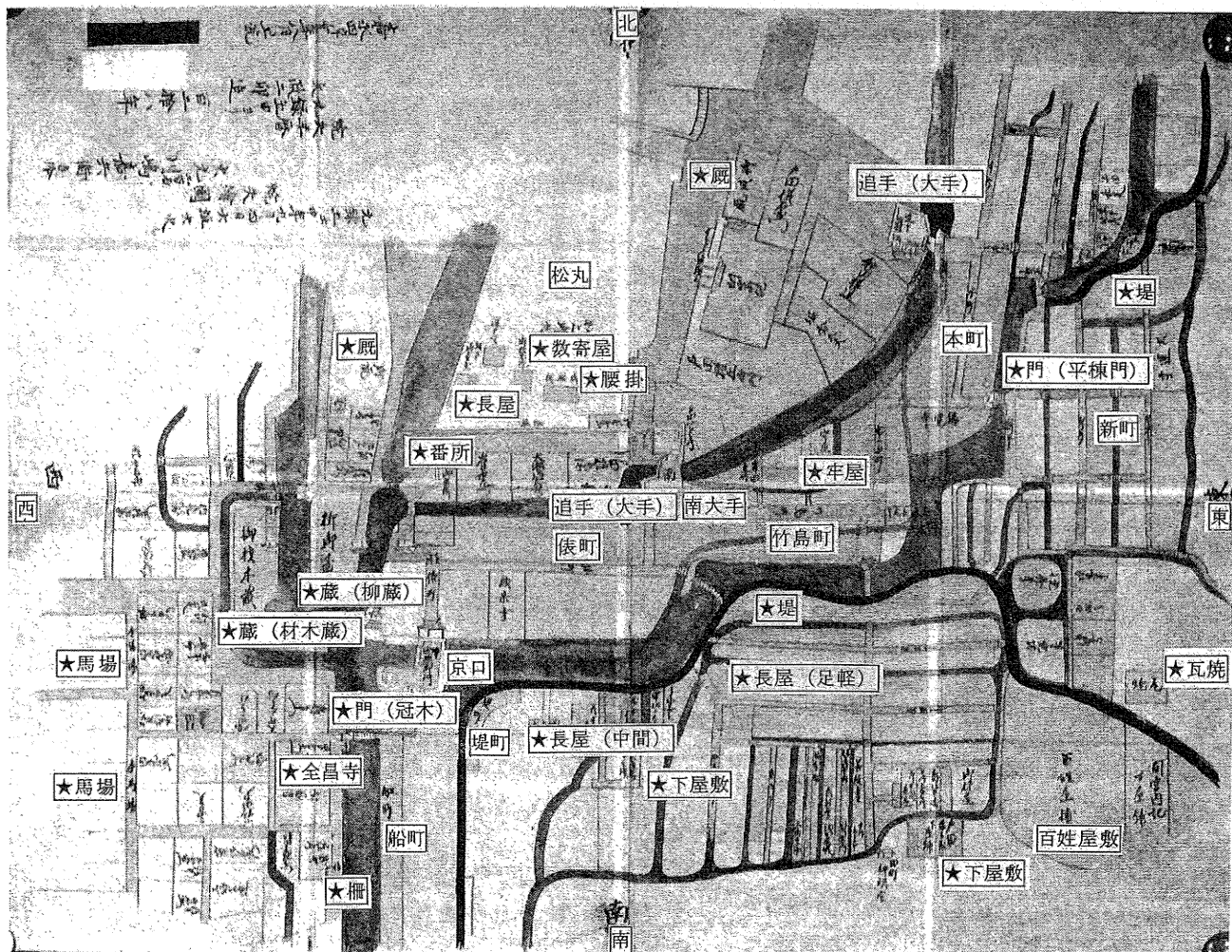


図-2 『大垣大火焼失絵図』(大垣市立図書館蔵・1692年・「表-1」の⑧)

★□：本考察で取り上げた施設

が、⑤には、長さ40m程度の平屋建ての長屋が「6棟」、南北方向に、西側より見た形で描かれている。

この平屋建ての状況からみると、当時、大垣では、こうした長屋に対して、方位を意識した計画は、とられていなかったと考えられる。

★番所 ⑧の松丸の西南に「番所」の書き込みがある。城や城下町の門の脇には、番所を置くことが多い。⑦・⑧・⑩の京口門の脇に、⑦の名古屋口門の脇に平屋建が描かれている。また⑦には、大手や南大手部分の門の脇にも同様の建物がみられる。

★腰掛 藩政時代の生活の中で、道路や川の脇のほか、建物の脇などに、「腰掛」を置くことは多い。⑧の松丸部分には、わざわざ腰掛の書き込みがあり、松丸での生活の一端をうかがうことができる。

★瓦焼 大垣では、⑧に「瓦焼」の書き込みが、城下町の東南部で、町の端にみられる。瓦を焼くため、煙を伴うことが考えられ、また、瓦焼きの材料や瓦そのものの置き場を確保する必要があったとみ

られる。同時に、城下町での需要に対応するためには、城下町から遠く離れた場所に瓦焼場を設けることによる、運搬上の不便さも考えての敷地選定がされたであろうことが考えられる。

一方また、この町屋敷や足軽屋敷・中間屋敷のある外堀外東南部は、城下町全体からみると本道の走る城下町の中央部と見ることができ、城下町への瓦の供給を意識した敷地選定でもあったとみられる。

★問屋 本陣と脇本陣との中央部分(竹島町)に、本道に面した形で問屋の書き込みがみられる。

この部分の問屋は、町屋敷の中心部分であり、商いの上で、大垣藩と特別な係わりをもっていたことが、配置上の位置付けより考えられる。

★神社 「表-1」から、大垣での神社として、城の西北にある「八幡宮」と、東南にある「天神社」をあげることができる。この二つの神社は、ほぼ城下町を二分した形の配置形態とみることができる。

なお、寺院の境内の中には、例えば清水橋の南(外

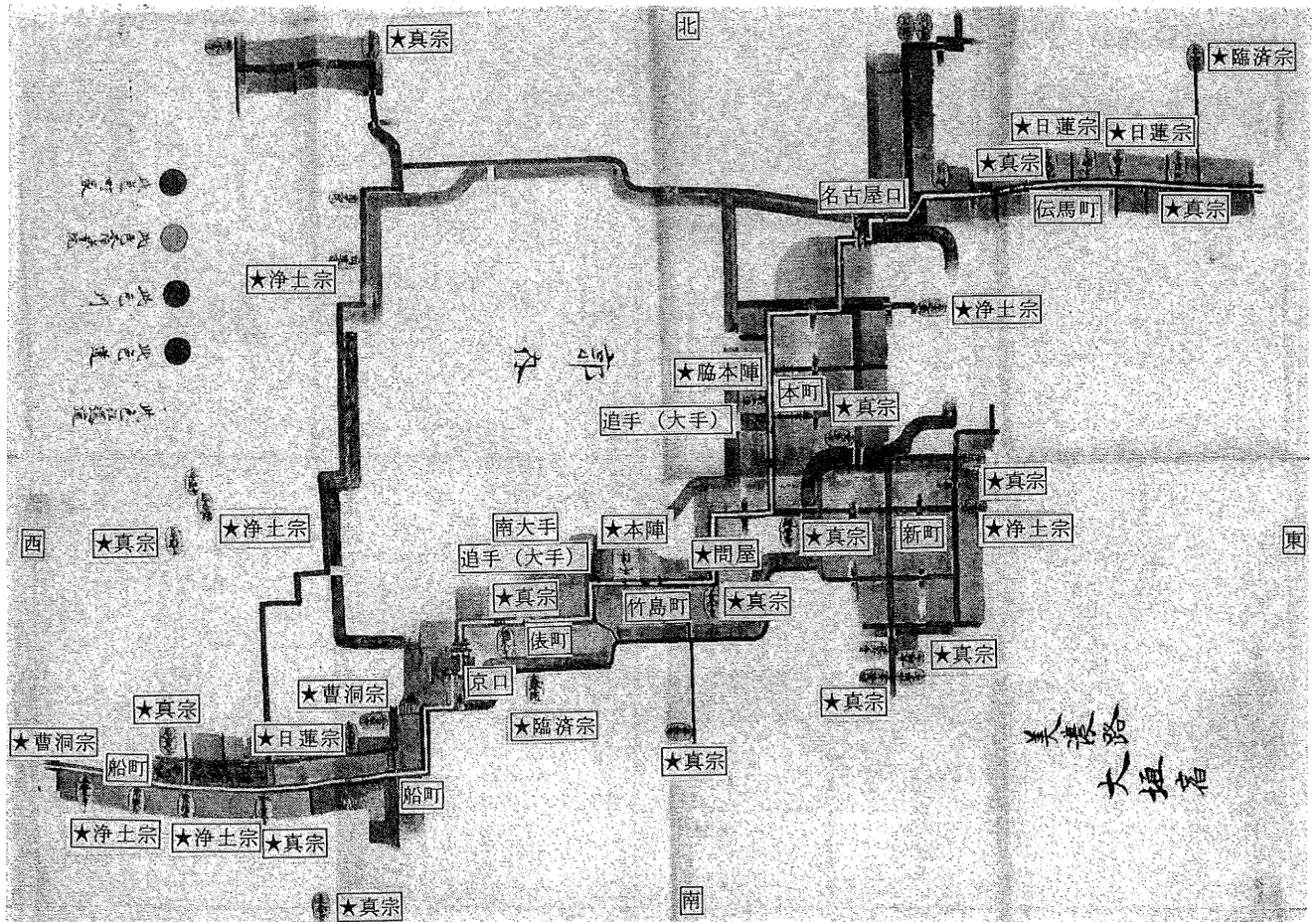


図-3 『美濃路大垣宿』(大垣市立図書館蔵・1852年~1863年・「表-1」の⑰)

★□: 本考察で取り上げた施設

堀外)に位置する「金蔵院」に「秋葉社」の書き込みと共に、建物が描かれているように(⑩)、祠をもつものがあつたとみられる。

★寺院 「表-1」で、大垣城下町の寺院をよく書き込んでいる絵図として、⑰(図-3)をあげることができる。⑰は江戸時代後期のものではあるが、寺院の配置上の性格を知る上で貴重である。

この⑰によると、大垣では、船町・俵町・竹島町・本町・伝馬町と走る本道沿いを中心とする部分に寺院が集中し、宗派では「真宗」が多い。

また、侍屋敷に近い部分に「浄土宗」が、城下町の周辺部に「臨済宗」や「曹洞宗」が目立ち、「日蓮宗」は、町屋敷の周辺部に位置しているとみることができる。

なお、⑰には、天神社の東側にある浄円寺(浄土真宗・西本願寺派)には、「出役地」の書き込みがある。加えて、この浄円寺の南側にある大運寺(浄土宗)とみられる境内にも、出役地の書き込みがある。共に、境内の規模が大きいとえるが、当時、寺院の境内が、兵を溜める部分としての役割をもって、

位置付けられていたとみることができる。

同時に、この城下町東側の部分は、清水橋周辺の侍に対しての出役地として考えられたとみられる。

5. 結言

城と城下町の施設は、時代の推移と共に、その配置形態に変化をもつものの、全体としてみると、川・堀・本道との位置関係に加え、城との位置関係や屋敷の性格を考えた配置形態がとられていたといえる。

また、軍事と共に、水運や格式を重視し、生活空間をいくつかに分けて仕切って性格付けを行い管理するという面も、施設の種類や配置の面からみることができるといえる。

参考文献

- 1) 大垣市編『新修大垣市史・通史編』、1967、大垣市刊。
- 2) 大垣市編『新修大垣市史・史料編』、1968、大垣市刊。